



特  
3154  
9

月宵部物語後談卷第四

本鳥山の黒髪

江戸

挑



福富町  
市川兼次郎  
三丁目

夫暮ふおあしふぬていとうの暮暮寒く志のたよりトウかいて  
戸牖完かきぞ村枕とて楽し紙あつたえど牛乳ふとるして生雁を  
寄りの賢者へ更ていとうの聖人もお利欲もさうさる者へよく  
く會はてぬる者へさるもさう其故はふとよ金銀ての物にせのま  
理をはくろふの實はてをさき道ま肯く集めたりと其れらの  
小いあつさるありさる古人の福もよぬる者へかきらむとんばにや  
して燈食非見あり燈食非見ありあつたはとたつたあつたあつた  
とつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
中だんごもがき毎ふゆり志をゆりまをさる中ふあつたあつたあつた

月宵部物語後談卷第四

一人のくはば紙が紙を紙のて實といふより後一有と存の二紙種と  
 して去るくその言早と知るをいふ返り首き業紙をて身紙會る  
 者のかさば紙種をいふ紙く申速く形うく小依屋の長者の今の身紙く  
 小紙く何いとして申のん子世にといふものあく不自申る事か  
 といふ祖又の無事といふいふをゆり得る身上るれ人の思ひ業  
 其血は助る者のありぬいりい無念の志相を感得て悲尋らつてか  
 身紙種をいふ紙種く小かよまよまといひ眼を終まの身紙種か  
 りて大後長者が紙といふも善法小善法をいふのうてる玉紙種  
 空々寂々たる時中叢系とある申今小紙種といふいふ紙種や天  
 善小善とて悪小善とて止してはよと明白なりと志るまかて四圍の紙  
 紙種が遊め小紙種は依屋の長者のかの善法を牛の角小打りけ善法は

月来り紙をせその身もま婦とをいひてかの山寺の門前かりの紙種と  
 まうけ月との系統紙とある事かくはと免れぬを世の人見る者  
 とかく牛小ひくして善光もまうと今の妻ま下りいするは事  
 とうて紙種く小紙種と蘭系の際村ある寂英の善をいふ女紙種を  
 福次身と申うて紙種の前をいふく紙種く紙種く紙種く紙種く  
 紙種く紙種く紙種く紙種く紙種く紙種く紙種く紙種く紙種く  
 前のかさらの紙種をいふて事若くむ申目の當られぬ紙種か  
 今早せんかうつきて善法打打象をいふ紙種く紙種く紙種く  
 くとも二三月はて女紙種は紙種く紙種く紙種く紙種く紙種く  
 の夜より紙種く紙種く紙種く紙種く紙種く紙種く紙種く紙種く  
 紙種く紙種く紙種く紙種く紙種く紙種く紙種く紙種く紙種く

里須崎の故ふ人々をばして杖のきり者りりる程に  
 りり死去りふ総念五丈堂の上人徳堂造士とや其大徳寺小幡に  
 おりしるが御弟子正体和尚の信濃なる芋井の里に正證庵といふ寺  
 院を頼りおのふ依て諸師の通のりしる御弟子十人を引連り  
 あり一宿の事りりる御幸忍ひあせて悪業の退く行念てなふ  
 たりふいと安くと結ひるひかの悪業をか家をこぼちたる御弟子一社  
 をあつて嵐紙結がたすいて後文相が未算御税の十念を授けられ  
 けり十巻と諸弟子の書寫せしめりいふ御地を清めて御弟子を  
 頼りしる小幡の御弟子出ぬまじり人を喰ひしる御弟子御弟子  
 のりりの中へ彼が因果のむむといひの中へ一巻を授けて御弟子  
 たりし二世の業障を引く御弟子善人の縁ありといふ御弟子の御弟子

ん意小幡の御弟子事りあふばしてかゝる業障の御弟子を御弟子かゝる  
 七世の御弟子を御弟子あふばしてかゝる業障の御弟子を御弟子かゝる  
 二つの御弟子御弟子の御弟子を御弟子御弟子の御弟子を御弟子御弟子  
 社と御弟子の御弟子一時は消滅してまじり御弟子の御弟子を御弟子  
 んが御弟子の御弟子一村に長と短として御弟子の御弟子を御弟子  
 殺せざる者りりる御弟子かゝる御弟子の御弟子を御弟子御弟子  
 たりし御弟子の御弟子を御弟子の御弟子を御弟子の御弟子を御弟子  
 たりし御弟子の御弟子を御弟子の御弟子を御弟子の御弟子を御弟子  
 たりし御弟子の御弟子を御弟子の御弟子を御弟子の御弟子を御弟子

昔掛宿の地也



伊勢物語

あまの  
あまの  
あまの  
あまの  
あまの



伊勢物語

くら小まゝと寂美村の善きかをねがひ死するも志ぬねむ余ね  
 ぐよは捨てるが孤さうなるもねがひ寂根取破屋で只執持木の石不  
 ともりぶねは休空返すの教化よりてきやうなる綱ひらさき建  
 何玉とりきくはひらりく小伏屋のふ代文古もいふて我り長  
 者うぶのまゝあつて兼耀んぼほ色をいふゆりてきやうなる  
 きめの小いれは区とそとく高野の列もふと七根き貴国をかすめ  
 曲て世うろれたり見ゆるん地と善きへひらととく安くくけ  
 がひ仕をむさばさふく大命をゆる申おまははあせふば黄金の  
 銀へんぼほまどと思ひ思ひて長者の付果えやと唯暮よん  
 を死りつねさうかえよけ程ゆるる高野殿より海津殿へ婚持のこ  
 ともひちく小薬入あるは世人の心とそれらの人々交りて月違つ

る長者かえ入るも思ひいよて付まて通人のとねがむくんと時ま  
 つるが長者が家へもこゝ我々のふ地持されさう比家虎切ん  
 ぢ〜ね〜肘切〜ゆるも不足の三つ頃科者子の中もてあひゆ  
 彼といはるといひたてなまはらうはもいふ〜申のふりありま  
 志ちきれぬのふり所願して及ぶる申もやあ〜んとま〜思業  
 をめがけつ〜も〜此者ども取多く集めてきて付桐原のり〜  
 み付と下西山の道を〜かひ東南の通路へ上岡舎地のり〜よ  
 細細させて互ひお尋ね合せつち〜あり〜行つて及方より控て  
 付とあひいぬ持と族の付流あり〜もわ〜は換まるとやある〜  
 と先より集え〜る者どもいひくまの桐六む〜一城の守持と好まゆの持  
 是らう〜ひの梳八退分の馬〜と〜の津の軍を寂美の お能美はの

育ちんらの更業と姑とてつひに能く合まらざるをいしくせ  
 づあぶき奴やふも人殺四五人をかりて母かこし居  
 統く長者がやがれを待けりあるま紙後の思ひ格破り位  
 濃國海軍の鉄骨の結納とのいれぬつり日へ孫吉甫うと目出  
 交與余のえまき定つらるるがて共わらぬ村く里く悪者若  
 入るみ家子持子ぬるかま子持の又物あをまき荒髪を包く  
 待伏をるまをいしはあつたれを格破り海軍の友家いふふふこの  
 一孤やれと母のむづかきふりしりく小郎つりくおん  
 ろれより人殺者眼とあつたれいふいふは格破り村を眼と  
 格破りの鉄しあつたれ格破り長者の格破りいふとあつたれ  
 莫村の悪徒善者格破りあつたれ小遠の格破りあつたれいふ  
 去るがは海入きの遠かふもあつたれあつたれが不測法のふりく  
 多き自ら命をたふすまじくさあつたれが才覚あつたれいふ  
 かりて身成おんあつたれ格破りあつたれ格破りあつたれ  
 あつたれあつたれ格破りあつたれ格破りあつたれ格破り  
 かくへ遠くつらるるあつたれあつたれあつたれあつたれ  
 小郎つと格破りあつたれ格破りあつたれ格破りあつたれ  
 されど格破りあつたれ格破りあつたれ格破りあつたれ  
 格破りあつたれ格破りあつたれ格破りあつたれ格破り  
 半成頭あつたれ格破りあつたれ格破りあつたれ格破り  
 格破りあつたれ格破りあつたれ格破りあつたれ格破り  
 格破りあつたれ格破りあつたれ格破りあつたれ格破り  
 格破りあつたれ格破りあつたれ格破りあつたれ格破り

去るがは海入きの遠かふもあつたれあつたれが不測法のふりく  
 多き自ら命をたふすまじくさあつたれが才覚あつたれいふ  
 かりて身成おんあつたれ格破りあつたれ格破りあつたれ  
 あつたれあつたれ格破りあつたれ格破りあつたれ格破り  
 かくへ遠くつらるるあつたれあつたれあつたれあつたれ  
 小郎つと格破りあつたれ格破りあつたれ格破りあつたれ  
 されど格破りあつたれ格破りあつたれ格破りあつたれ  
 格破りあつたれ格破りあつたれ格破りあつたれ格破り  
 格破りあつたれ格破りあつたれ格破りあつたれ格破り  
 半成頭あつたれ格破りあつたれ格破りあつたれ格破り  
 格破りあつたれ格破りあつたれ格破りあつたれ格破り  
 格破りあつたれ格破りあつたれ格破りあつたれ格破り  
 格破りあつたれ格破りあつたれ格破りあつたれ格破り







善太



小右郎

小右郎

善太の  
 敵の善太  
 討つて  
 善太  
 討つて









小左郎  
退

弓を既

小左郎



光輝赫々として堂宇の内照照し油煙堂として相明を照らすも  
 び院山のかりと文字の火は薪とらふも具ふにあくねしと月見  
 かりつるも共なりその例は満熱とてひとつの煙火ありそれが光他の煙  
 少まうして咽咽する中を言はれども見る人は煙のふりて誰人此  
 強之何者の借費せども尋ひざる者もまじしけけ一煙の半成毒  
 く尋ぬるふは考の別作がぬのいふまが道ん成起して普光寺ふ  
 常煙咽然寄附せんと思はれども名々のおぼてうつて長者が社又なる  
 平とり入りのよその金銀らむいれね極死して後子生米の悪念成りかえ  
 て飛業成ひきいじ言せ道は障るれども毒のいふかか念仏三昧  
 の切力よりて業園を果して天上ま生れけんと成るの別作も文が  
 生の悪終けせふなりあるて親の因果の報應がて成むい無定の業

紐をうけて獄屋に終りを送るはいぬ霊もぬく中音まよひ圖慶まの  
 ぼやうへんけしてせよ母孝終せ半好いありひをかぶらうがう成  
 りん具もふんのうち子合せてまごの退善供養もかると女がんが  
 かりの志し紙朝又家先をかかて佛も小供もまをるこあじと  
 けむと相養ぶのふまは匠の切らるとありてそごの正徳助たまつるふ  
 つけ普光寺のふあふ終り一煙をまげまけりまろせの人へ後くまけ  
 る紙ひいつら中まじして依屋の長者が煙とり入るも普光寺のいはる  
 る貧女が煙はあふるごととそのふがけ室つるも紙費てまのせを  
 もかふりなりまを備ひら紙がて物をまつるとたへ大心覺せ  
 ちふ指込とはい佛と同行つらう紙ひつたて二處の業障ありと  
 りかひけと死忽ち退散せうと説せたり信んば定ふりて物惑の

ねの心を生むるの軍は往々極楽の園にたりつ事あるはほと八溼極楽は  
 中ぞ有るもの奴いさう先の実の位をわけて未幾結果の園に帰入り物  
 ん自己の九ん奴去り如木の西神まきびさるものちさうぶだごて祝なす  
 られを踊陀の舞舞まハ男のよりも女人女人よりも悪人とちういさひていぬ  
 悪人の九まう共今日只今より己まが機のかげさうぶつたて非見奴  
 逸のとそをさげさてぬの御ふまがなむるとたその母々の位はて  
 救ひさやふさうさうさう小依のゆい代々ちの悪人さうびさうかの善さす  
 かさうさるものふてまをさるものふてその密河押願一板又まじま  
 ごと我りのおせを悪と企てま孤奴一まば復ま奴れ一ま河安樂ま  
 んとまさるるかはさうさうさう小多郎が助さるさう河の河安樂ま  
 解さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

ぶさささうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 昔してさうさうの程も推さすはとさうさうさうさうさうさうさう  
 事らさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 石はさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 恩さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 きさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 志はさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 かんを善さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 ちうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 なるさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 さま龍吟さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう





呂宋言子言者之四

小

小

殊子集実温厚のほれり入りて身持が中はて分て悪念有人と争ひ  
 たりかひ人をあやむ人を偽り人の相成ぬとある事なきあまも花明止  
 不使まあひてそこをく懐ひついでいりけるにてもあはれかひあく  
 いらる殊も人の身より思ふ極うやろの世悪紙のほりて甚一紀のみあ  
 中て降のほりし極きものけあしするやうはとなきはは中一建つと  
 して悪事をあて早くそあはれ道に入るべしと教へしあはれ心  
 の引く友の難をたはれた疾を消え兄弟も夫もなきいなり降  
 とあはれ心せ極子及むるもなりたはれあはれ心せ降  
 うらへる者たはれ憂ひうら極く降むらひてやろやろの君なり  
 かまが等し悪徒をまけけたあまも心せ極の極とるき事わらひ  
 且たもあはれ心せ極あはれ心せ極あはれ心せ極あはれ心せ極

教へし中を極子集実のほりて其ころうの至極なりあるとらむ悪念を  
 下り善者とはじむるも我家の業なり今悪念を悪事と捨つてはれその  
 心強心くするもその心かたうら極く依て我様のあはれ心せ極  
 心人々あはれ又今かまがわら中を極道出せしはたちまら刑儀をうくる  
 ことほのあはれあるべし我例のあはれ心せ極を我あはれ心せ極  
 まぬるべし身持するもの事も極あはれ心せ極を止せとわらぬるも  
 汝はいとぬはれ心せ極も彼を善道に引入るうらわが例をたまする  
 らむはれ心せ極や何事の國へ終るも人々一人の業なりぬら心せ極  
 わが例のあはれ心せ極の心せ極とらりしをわらぬるも悪人夫の心  
 ころ心やを極くし悪心極ひるがたして善心たちちりしとぞかの心  
 か身はれ心せ極あはれ心せ極ある体屋の長者から極のころ心せ極

きつふしと有難かりはとまら

月宵鄙物語後談卷第四終

